

係が想定でき、出土遺物の様相から6世紀後半～7世紀前半頃に営まれた可能性が高い。

県道改良工事に伴う野首第1遺跡の調査時（平成12年度）に横穴式石室を有する古墳が2基確認されているが（野首1・2号墳）、住居はこれらの古墳を見上げる谷底に立地しており、その性格を検討する必要がある。

当該期の遺物はほとんどが表土からの出土であるが、土師器杯・甕・須恵器杯・高杯・壺・長頸壺などがみられる。須恵器に関しては古墳の副葬品と考えられるものも含まれる。

③ 近世

A区にはL字形を呈する石垣の存在が知られていたが、調査の結果、大規模な造成により平場を造り出し、縁辺を石垣・土塁で取り巻く屋敷の存在が明らかとなった（写真14・図16）。建物跡は桁行6間以上、梁行4間の身舎で、東面から南面の一部に庇（縁側？）が取り付く。身舎部分で11.6m（尺貫法の6間）×7.2m（同4間）を測り、高岡町高岡麓遺跡の屋敷遺構と概ね同規模である。礎石建ち瓦葺きの建物と推定され、柱穴の配置から間取りの復元も可能と思われる。

建物跡の周囲からは多量の近世陶磁器が出土している。磁器は基本的に肥前系であるが、「くらわんか手」とされる粗製厚手の碗・端反碗が多くを占め、広東碗・湯呑碗・コバルト染付がそれに続く。そのほかに筒形碗や朝顔形碗（白磁・青磁染付）が少量みられ、全体としては18世紀後半～19世紀の年代観が与えられる。陶器では薩摩系の碗・皿・土瓶・擂鉢、関西系の碗・花生、堺系の擂鉢などが出土している。大正時代以降の陶磁器はほとんどみられない。

また建物跡の北東に近世墓石2基が安置されていたが、それぞれ弘化3・4年（1846・47）の年号が刻されていた。さらにこれらを見下ろす一段高い平場に近世墓台座が2基分検出され、周辺の精査を行った結果、墓坑を1基確認した。墓坑からは人骨が少量出土している。

陶磁器以外の遺物としては銭貨（寛永通宝）・煙管・簪・砥石などのほか、土製人形（人物・狐・フクロウなど）・サンゴ化石といった特異な遺物も出土している。特にサンゴ化石はテーブルサンゴの形状を保ったままの大きな破片が多数みられるため、付近の海岸に漂着したものとは考えられず、何らかの需要により入手された可能性が高い。

（3）小結

調査が継続中であるため、いまだ不明な点が多いが、近世屋敷地のほぼ全体を調査できた意義は大きいと考えられる。屋敷の存続期間については、土塁盛土中の出土陶磁器には端反碗・湯呑碗が非常に少なく、コバルト染付は全く含まれないことから19世紀初頭頃の創建、遺跡全体でも大正時代以降の陶磁器がほとんど出土しないことから、明治年間での廃絶が想定できる。石垣は隅部で高さ2.5mを測る大規模なものであり、さらに出土遺物の中には特異なものが認められるなど、屋敷の性格付けには多くの検討を要する。

出土陶磁器は肥前系・薩摩系・関西系など多様性に富み、特に薩摩系陶器が少なからずみられる点は、近世高鍋藩における物流の様相を考える上で興味深い。

また青木遺跡（北東の低段丘上）・県道改良工事に伴う野首第1遺跡（北西の台地上）・野首第2遺跡（南の台地上）と隣接地が限無く調査されており、各時代を通じて地形の違いに起因する利用形態の差異が明らかになるものと期待される。



写真14 A区近世屋敷跡（北東より）

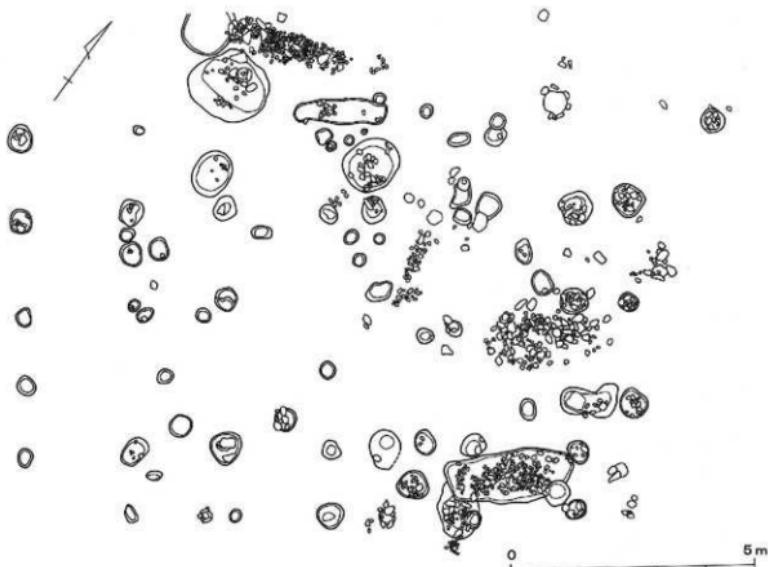


図18 A区近世屋敷跡 (1/200)

47 のくび 野首第2遺跡 (高鍋町大字上江字野首)

(1) 遺跡の立地

小丸川を北東に望む舌状台地上に立地する。遺跡の北側及び南東側は、緩急の差はあるが、いずれも斜面であり、遺跡も北東にごく緩やかに下る斜面上に展開している。遺跡の標高は35mを測る。

(2) 調査の概要

調査区全体を便宜上、A・B・Cの三小区に分割した。現在、A区の調査を終了し、C区の調査をおこなっている。本遺跡の土層堆積に関する特徴として、宮崎平野部の遺跡では一般的にみられるK-Ahの堆積がほとんど観察されない点がある。このため、耕作土直下の遺物包含層からは、異なる時代・時期の諸遺物が混在して出土している。

A区では主に後期旧石器時代、縄文時代早期・後期・古墳時代中期の遺物が、これに加え、C区では、古代と中世の遺物が確認された。縄文時代以降の遺構として、A区では、古墳時代中期の竪穴住居10軒、縄文時代後期の竪穴住居1軒、縄文時代早期の集石遺構100数基、炉穴ないし土坑群100数基がある。C区では、古代及び中世以降の掘立柱建物4棟、道路状遺構、古墳時代の竪穴住居7軒、縄文時代後期の竪穴住居11軒、縄文時代早期の集石遺構10数基を確認しており、炉穴などそのほかの遺構も含め、今後も多数の遺構検出が見込まれる。



写真15 遺跡遠景（小丸川を北東に望む）

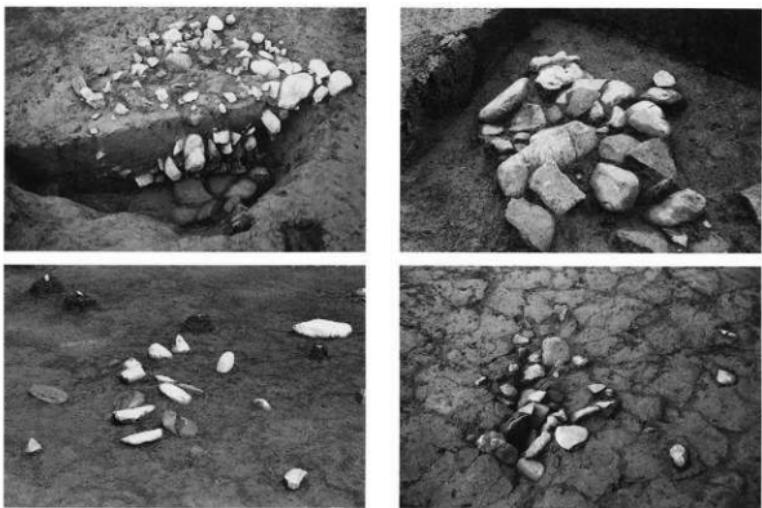


写真16 A区における礫を伴う遺構

左上：縄文時代早期の集石遺構

右上：AT直下の礫群

左下：MB 1上部の礫群

右下：MB 3上部の礫群

後期旧石器時代の遺物・遺構も、両調査区で確認された。A区では複数時期にわたる後期旧石器時代遺物包含層が確認され、多数の礫群が検出されている。C区においても、ほかの時代の遺物との混在ではあるが、該当する遺物が散見され、ほかに細石刃石器群の存在もある。以下、時代毎にA区とC区の様相を対比しながら述べていく。

① 後期旧石器時代

A区において確認した後期旧石器時代の遺物包含層は都合5枚におよぶ。古いものより順に
 ①MB 3下部（礫塊石器類+礫群）、②MB 3上部（ナイフ形石器・台形様石器・剥片・石核+礫群）、
 ③MB 2上部（ナイフ形石器・剥片・石核+礫群）、④AT直上（剥片・石核+礫群）、⑤MB 1上部～中部（ナイフ形石器・角錐状石器・削器+礫群）となる。以上は層位的所見による大別であるが、①に含まれるナイフ形石器の形態は、二側縁加工・基部加工・一側縁加工（国府型）など多様性に富み、さらなる時期的細分を考える必要がある。いずれの層準の石器群にも礫群が伴い、①をのぞけば、礫の分布が散漫なものと密なものが認められる。ただし、構成礫の観察からは微妙な差異も看取される。なお、C区では、現在までに、①に相当するとおぼしき遺物の出土がある。

② 縄文時代早期

A区において多数確認された集石遺構には、深さ0.8mを超える土坑を伴うものも散見される（写真16左上）。土坑の有無や規模、構成礫の様相から、いくつかの類型設定が可能である。注目されるのは隣接して検出された炉穴及びこれに類する土坑との関係である。これまでに確認され



図19 C区における縄文時代後期の推定生活面と遺構の分布（1／400）

たところでは、両者の切り合い関係には、集石→炉穴、炉穴→集石のいずれもが認められている。遺構内から出土する遺物も押型文系土器という点で共通しており、両者の密接な関係を想定させる。炭化物のAMS年代が近似する点もその傍証といえる。一方、今後調査を進めるC区の集石遺構・炉穴の周辺からは押型文系土器は出土しておらず、かわりに貝殻文系土器群の出土がみられ、今後、両調査区の様相差に留意する必要があろう。

③ 縄文後期・晚期

A区とC区にみられる共通の様相として、当該期に帰属するものと考えられる打欠石錐、磨石・敲石類、打製石斧、磨製石斧という石器器種組成とそれらの大量出土が注目される。また、石斧類の製作に伴う可能性も指摘できる剥片・碎片類もまた多数出土している。加えて、両調査区はK-Ahの堆積がみられない点、縄文後期の推定生活面があたかも斜面地を平坦化するために削平を受けたかのような状況を示す点（図19）などを共通する様相として持っている。この現象が人為か自然か、いずれに起因するものなのかも、追究すべき課題として残る。

一方では、遺物・遺構の面における明瞭な差もあり、C区では複数みられる後期の竪穴住居がA区では1軒のみである点、A区では一定量認められた晚期の遺物（無刻目突帶文土器、孔列文土器、組織痕土器）などの存在がC区では希薄な点、逆にA区の後期遺物には認められなかった



写真17 挖立柱建物跡（S B 2・S B 3）検出状況

土器片錐がC区では一定量の出土がある点などがあげられる。

④ 古墳時代の遺物・遺構

A・C区両調査区の古墳時代の遺物・遺構は、時期的には中期に属するものであり、ほかに堅穴住居の分布様相などにも概ね類似した様相を指摘できる。ただし、A区において確認された壁溝を有する堅穴住居は、C区ではいまのところ検出されていない。

⑤ 古代・中世の遺物・遺構

A区では中世の青磁片など遺物のみの確認にとどまったが、C区において比較的良好な残存状況を示している。遺物では、他時代の遺物と混在する出土状態ではあるが、綠釉陶器、古代以降の土師器、布目瓦片、管状土錐などが注目される。その帰属年代については慎重であるべきだが、綠釉陶器の産地に関しては、畿内産で占められる傾向が窺える。また、図示していないが、注目される遺構として、硬化土壤を埋土とする小穴が連続的に配された道路状遺構が挙げられる。この遺構はC区の中央付近を北東→南西方向に走っており、今後B区の調査においてその先を確認することが課題となる。その東側には明確な時期決定根拠に乏しいが、2棟の掘立柱建物が検出され、遺物・遺構相互の関連にも注意を払う必要がある。このほか、伴出する遺物の様相から中世以降の可能性が高い掘立柱建物も確認されている。

(3) 小結

通時代的な傾向として、A・C区間における空間利用形態の違いが注目される。A区とC区の間にあるB区を含め、上記した諸点を踏まえて今後の調査にあたりたい。

50 老瀬坂上遺跡 (高鍋町大字上江字北中原)

(1) 遺跡の立地

小丸川南岸に広がる牛牧原の縁辺近くの南西にのびる尾根筋（標高約92～105m）に位置する。北から南に向かって下り、南側の谷部縁辺付近で平坦面が形成されている。

(2) 調査の概要

前年度に引き続いて縄文時代前期～古代の遺物包含層であるK-Ahの二次堆積層及びML 1、Kr-Kb、ML 2面での遺構検出・掘り下げ作業を行った。

K-Ahの二次堆積層は各時代の遺物が混在した状況で出土している。地形的な要因が強いと考えられる。一方、遺構検出については埋土と地山の区別が困難で、多数の風倒木による攪乱も著しく、時期不明の小穴、土坑数基と奈良時代後半の竪穴状遺構1基、火葬墓1基の検出にとどまつた。遺物は前年度の概要報告書に記載した通りである。

① 後期旧石器時代

Kr-Kb相当層では、礫群が4基検出された。礫は縄文時代早期の集石遺構より小ぶりで赤化した角礫が多いが、密集度は低い傾向であった。遺物は黒曜石製の細石刃、細石刃核、剥片、碎片等が出土した。

ML 2相当層では礫群が3基検出された。礫の大きさは大小様々で、相対的に円礫が多い。赤化した礫が一部存在している。遺物は頁岩製の角錐状石器、剥片、石核等が出土した。

② 縄文時代早期

ML 1相当層上面では縄文時代早期の集石遺構38基とその周囲に広がる散礫が検出された。遺物は縄文時代早期の貝殻文系・押型文系土器や打製石斧、石鎌、石匙、石錘、磨石、石皿等が挙げられる。

集石遺構は調査区北側の丘陵頂部と、南側の平坦面に濃密に分布する。規模や構成礫、掘り込みの有無なども分布域の違いによって差がみられる。また集石遺構のうち4基は掘り込みの床面に比較的大きな礫による配石がみられた。遺物は、全体的に点在した状況であったが、中にはチャート製剥片・碎片が約5m四方に集中する石器ブロックもみられた。

③ 古代

調査区南側平坦面に一辺約2mで方形の竪穴状遺構が、その西側に火葬墓が検出された。竪穴状遺構からは須恵器蓋杯、布痕土器が出土した。火葬墓は円形土坑に藏骨器を埋納したもので、須恵器短頸壺を身とし、須恵器杯蓋を蓋に転用している。土坑埋土は炭化物を多量に含んでいた。この2つの遺構は須恵器の型式から8世紀後半頃の時期と考えられる。

(3) 小結

老瀬坂上遺跡では様々な遺構や遺物が検出されたが、その中で特に火葬墓が検出されたことは牛牧台地周辺の古墳時代から古代における地域社会を考える上で重要であるといえる。隣接する下耳切第3遺跡では、古墳時代終末期の古墳と地下式横穴墓が検出されており、古墳や地下式横穴墓の終焉と火葬墓の出現を考える上で好資料となりえる。

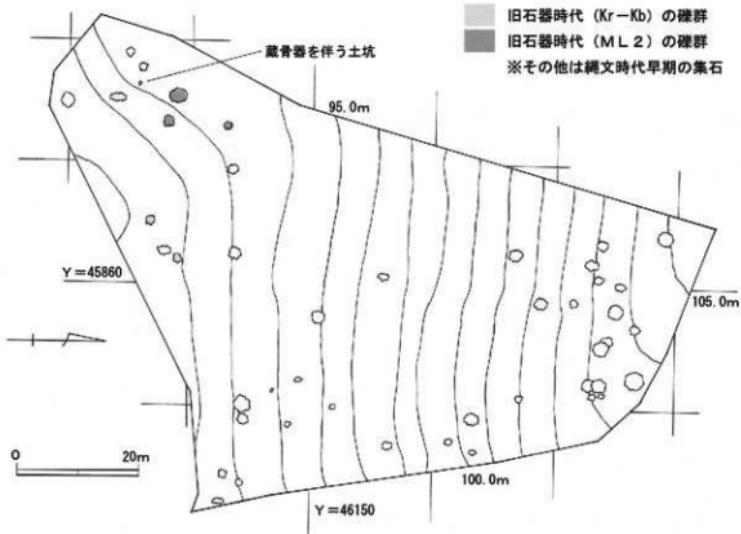
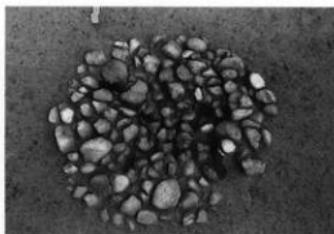


図20 造構の分布 (1/800)



写真18 左：蔵骨器検出状況（東より）



右上：縄文時代早期の集石造構
右下：同集石造構の底部

51 下耳切第3遺跡 (高鍋町大字上江字下耳切)

(1) 遺跡の立地

小丸川南岸に広がる牛牧原（標高約90m）の北東側端部に位置する。低地との比高差は約75mを測る。

(2) 調査の概要

平成12～13年度にかけて縄文時代中期～後晩期と古墳時代後期～奈良時代前半を中心とした集落や墳墓群の調査を行った。今年度はK-Ah下のML1（IV層）とKr-Kb（V層）の精査を実施した。ML1では縄文時代中・後期、古墳時代後期の堅穴住居や土坑による削平が著しかったが、貝殻文系土器、石鏃、敲石、台石、剥片や碎片等が出土し、集石遺構が確認された。またKr-Kbでは細石刃核、細石刃などが出土したが、遺構は確認されなかった。ここでは縄文早期の遺構と遺物の概要を中心に述べることとする。

① 縄文時代早期

縄文時代早期の包含層は調査区全体に広がらず、特に老瀬坂上遺跡との間を貫く開析谷の縁辺に沿うように展開する。遺構は集石遺構31基が検出されたのみで、土坑、炉穴等の遺構は認められなかった。

集石遺構は、調査区内で東端、中央部、西端と大きく3群に分けられる。西端部では単独で散漫な広がりを示すが、中央部と東端部では数基で群をなして展開する。東端部の集石遺構は直径2m前後で比較的大きく、礫は尾鈴山酸性岩主体の大ぶりな角礫が多い。一方で中央部では直径1m前後で、礫は握り拳大～親指大と破碎礫で赤化が著しい点が特徴的である。

比較的大きな集石遺構は下部構造に掘り込みを持つものが多く、掘り込みを持つものの中に掘方と礫の間に埋土を有するものも検出された。

土器は貝殻文系や押型文系（楕円）の深鉢片で、縄文早期後半～末の所産と考えられる。それぞれ2～3個体ほどで、包含層全体の出土量に比して土器の占める割合が極端に少ない。

石器は石鏃、石鏃未製品、剥片、碎片、石核、磨石、石皿、台石等が出土した。石鏃や石鏃未製品の石材は殆どチャートであり、剥片や碎片も同様であった。これらのチャート製石器出土のあり方は、石器ブロックとして明瞭な形で見出せず、全体的に散漫な状況であった。

(3) 小結

縄文早期包含層の調査では、後世の削平が著しかったにも関わらず、石材がチャートの石鏃や石鏃未製品、石核、剥片、碎片が比較的大量に出土した点が注目される。

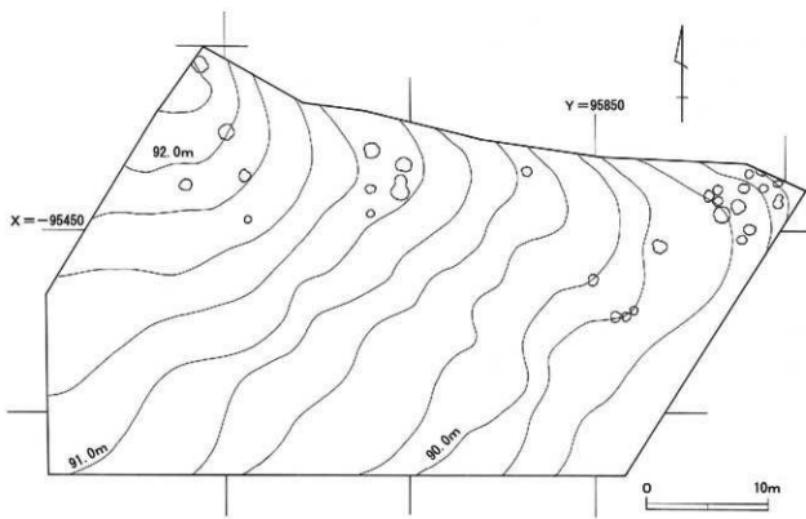


図21 縄文時代早期遺構の分布（1／800）



写真19 集石遺構分布状況（南西より）

53 唐木戸第1遺跡 (高鍋町大字上江字北唐木戸)

(1) 遺跡の立地

高鍋町の西部に広がる三財原段丘面上の中央部（標高約83～80m）に位置する。丘陵から派生した扇状地の端部付近にあたる。調査対象箇所は、北東から南西に向かってゆるやかに傾斜している。

(2) 調査の概要

本遺跡では、K-Ah降下以後の遺構や包含層は検出されなかつたので、縄文時代早期の遺物を包含するML 1 (IV層) 上面での遺構検出を行い、MB 1 (Va層) まで掘り下げた。石鏃、スクレイパー、剥片等が出土し、石器ブロックが確認された。さらに、MB 1 (Va層) 上面での遺構検出を行い、ML 2 (VI層) まで掘り下げた。

① 後期旧石器時代

礫群が1基検出された。構成礫は、拳大のものがほとんどで石材の多くは尾鈴山酸性岩で赤化していた。

遺物は、ホルンフェルスを素材とする剥片、ナイフ形石器、角錐状石器等、十数点が出土した。

② 縄文時代早期

遺構については、石器ブロック1箇所が検出された。ブロック内で出土した遺物は、スクレイパー、石核、剥片等である。包含層より、チャートを石材とした石鏃、ホルンフェルスを素材とした剥片、スクレイパーが散漫な状態で出土した。遺構・遺物共に分布密度は低いと言える。

なお、ML 1 上面で土坑が4基検出された。うち1基(SC 4)は、陥し穴とみられ底部で逆茂木痕が確認された。ほかの3基の土坑は長径1.4～2.0m、短径0.8～1.0mの梢円形で、検出面からの深さは0.75～2.05mを測る。等高線上に、列状に弧を描くように並んでいる。

(3) 小結

本遺跡の縄文時代早期に関しては、遺物の多くが製品であり、製作の痕跡は希薄である。また時期の検討を要するが、陥し穴がみられたことから、河川に面した狩猟の場としての在り方が想定できよう。

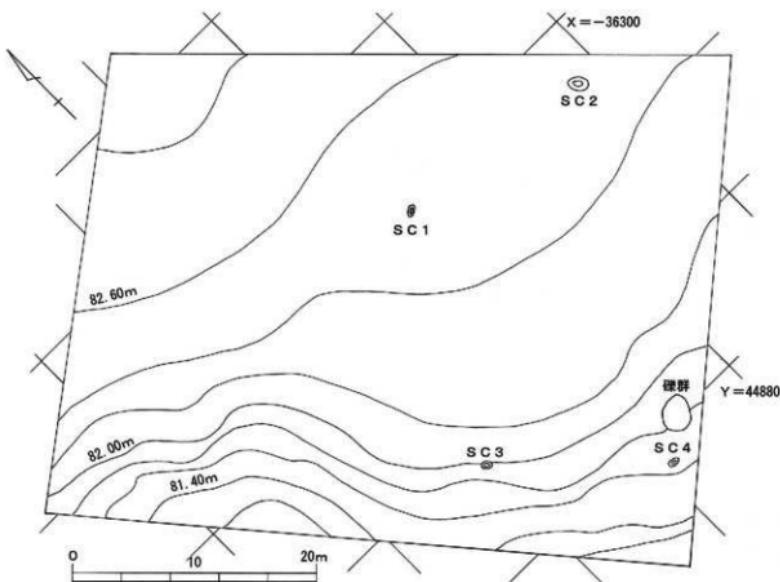


図22 IV層造構の分布 (1/400)

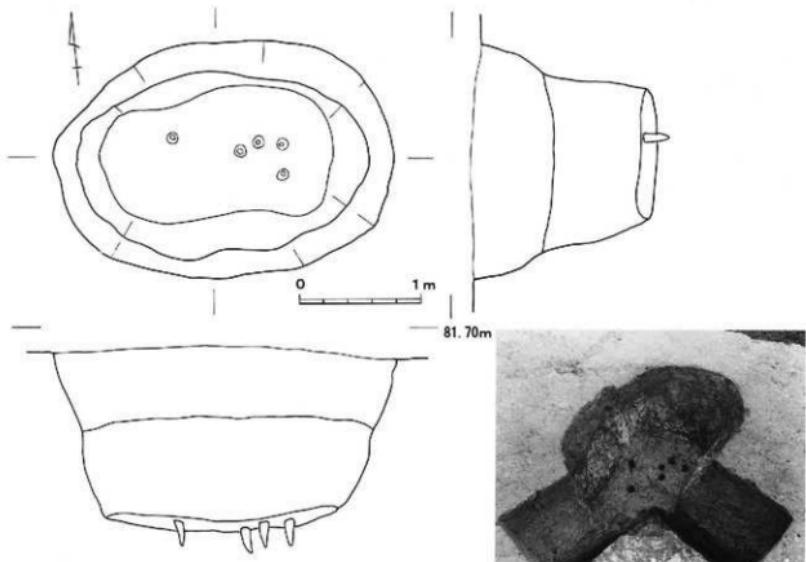


図23 SC 4 (1/20)

写真20 SC 4 完掘状況 (西より)

からまと
54 唐木戸第2遺跡 (高鍋町大字上江字北唐木戸)

(1) 遺跡の立地

高鍋町の西部に広がる三財原段丘面の中央部（標高約82m）に位置する。調査地は、北東側の谷部に向かって緩やかに下る傾斜地となる。

(2) 調査の概要

黒色土（II層）を掘り下げK-Ah（III層）上面で遺構の検出を行った結果、掘立柱建物5棟、竪穴状遺構1基、土坑4基、溝状遺構8条が検出された。掘立柱建物や竪穴状遺構は、調査区南側の緩斜面に展開し、溝状遺構は東側の谷部に向けて延伸する。

一方、ML 1（V層）では、縄文時代早期の石鏃1点が出土し、Kr-Kb（VI層）中から頁岩製剝片が2点出土したのみで、縄文早期～後期旧石器時代の遺物包含層は希薄であるといえる。本遺跡は、現在調査中であるため、これまでの成果についてまとめることにする。

① 中世

竪穴状遺構は、一辺約3mの隅丸方形プランで周壁に小穴が巡る。床面には白色粘土塊と焼土が集中する部分があり、カマドの可能性がある。遺構の時期は埋土中の土師器皿から中世と判断した。

掘立柱建物は、2×3間庇付が2棟、庇を持たないものが1棟、2×2間が1棟と、2×5間庇付が1棟である。これらの建物は「コ」字形に配置されている。時期は柱穴埋土中から遺物が出土していないが、周辺の遺物包含層の状況や柱穴埋土の状況から竪穴状遺構と同じ中世と考えられる。

調査区の北側にあるSC 1は、長辺4.5m、短辺2.5mの長方形で埋土にKr-Thが堆積していた。また、谷部に面する低地には5条の自然流路が確認された。ただし、中には、継続的な水の流れを示す痕跡がみられなかったり、人工的に掘削したと推定されるような断面形をなすものがあり、慎重に調査を進めている段階である。遺物は埋土中から古墳時代中～後期の土師器の高杯や杯、須恵器の杯身、中世の土師器等、底面付近より弥生土器、磨製石鏃が出土した。

(3) 小結

後期旧石器時代～縄文時代早期のあり方は、同一丘陵頂部付近にある唐木戸第3遺跡よりも、谷をはさんだ唐木戸第1遺跡のそれと近似しているといえる。一方、中世に属する掘立柱建物群や竪穴状遺構、旧河川との通時的・共時的な関係把握を進め、集落景観を復元する課題が残った。

さらに、Kr-Thを埋土とする土坑は、近年、西畠原第2遺跡・北牛牧第5遺跡など検出例が多く知られるようになったが、性格が明らかとなっていない。



写真21 遺跡遠景（北より）

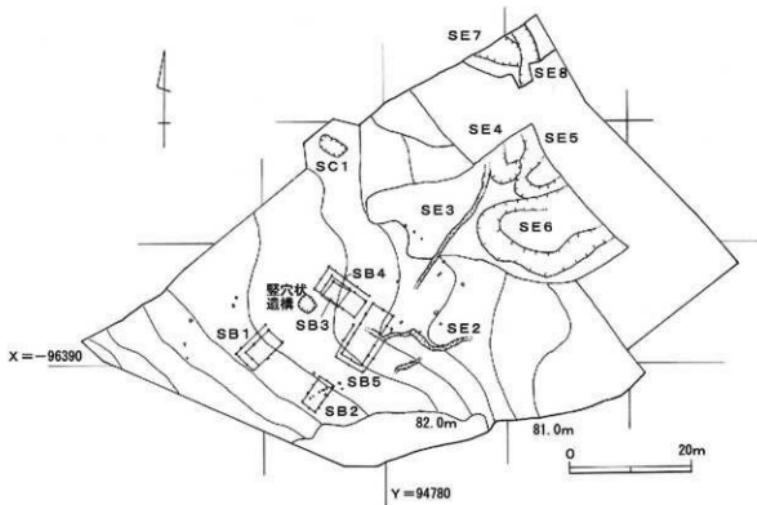


図24 遺構の分布（1/800）

55 唐木戸第3遺跡

(高鍋町大字上江字北唐木戸)

(1) 遺跡の立地

高鍋町の西方、宮田川左岸の三財原段丘面の縁辺部（標高約85m）に位置する。遺跡の南西側は比高差約14mの段丘崖になっている。

本調査地は、戰後まもなく土地の造成が行われ、丘陵の高まった部分が削平されて、平坦な現地形となった。

(2) 調査の概要

調査区を調査の都合上、A区（南西部）とB区（北東部）に分割し、本年度はB区の調査を実施した。

まず、縄文時代草創期から早期の遺物等を包含するMB0（Ⅲ層）及びML1上部（Ⅳ層）の掘り下げを行い、遺物・遺構等の検出作業を実施した。、統いて、後期旧石器時代の遺物等を包含するML1下部（Va層）及びKr-Kb（Vb層）を掘り下げ、順次Kr-Iw上面（XII層）まで調査を進めた。

MB0及びML1上部からは、土器片、石鏃、細石刃等が出土し、集石遺構が5基、焼土を伴う土坑が7基確認された。また、ML1下層及びKr-Kbを中心に、ナイフ形石器、角錐状石器、石核、スクレイパー、敲石等が出土し、礫群が6基確認された。

① 後期旧石器時代

A区の遺物は全体として製品が少なく、大形のものを含む剥片の出土量が多かったが、今年度調査したB区では、ナイフ形石器、角錐状石器等、製品の出土数が多かった。さらにチャートを石材とする角錐状石器、水晶の剥片が出土したことが特筆される。また、MB2より礫塊石器と推定される遺物が出土した。

② 縄文時代草創期～早期

MB0及びML1上部にかけて出土した遺物のほとんどが縄文時代早期の範疇で捉えられる。確認された5基の集石遺構は、検出面及び礫の特徴（大きさや石材等）などから、A区で確認された17基の集石遺構と同時代のものと考えられる。

なお、Kr-Kb層中で陥し穴1基、土坑4基が検出された。陥し穴は長径1.4m、短径1.2m、残深2.3mを測り、XII層まで掘り込まれていた。逆茂木痕は確認されなかった。

(3) 小結

本遺跡では、後期旧石器時代から縄文時代早期にかけて人の営みが断続的に形成されていたと考えられる。特に後期旧石器時代の礫群・遺物や、縄文時代早期の集石遺構、土坑が確認されたことは重要な成果といえよう。



写真22 遺跡全景（南東より）

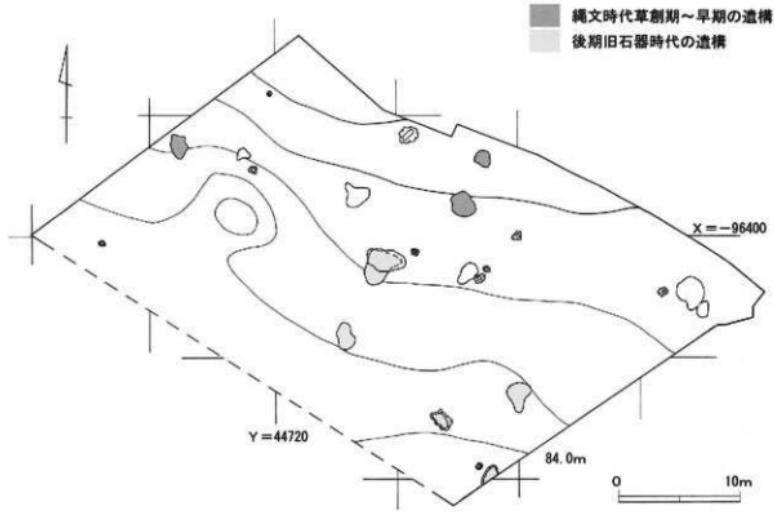


図25 B区造構の分布（1/400）

(1) 遺跡の立地

標高約80mの丘陵の北東縁辺部に位置する。遺跡西側には、緩やかに上る丘陵が連続し、また北東側は、宮田川支流、小並川に落ちる急崖となっている。調査区は、丘陵の尾根部から南に下る緩斜面にあたる。

(2) 調査の概要

本遺跡は、後期旧石器時代～縄文時代早期まで、重層的に包含層が確認された複合遺跡である。昨年度より調査を継続しており、平成13年度は調査区北東半分、今年度の調査は南北半分となる。

① 後期旧石器時代

MB 2 (Vlb層) 下位では、尾根筋に近い平坦面から礫群2基、剥片や礫塊石器等が確認された。礫群は、完形礫で構成されているものが多く、礫群周囲に単独礫はあまりみられなかった。礫塊石器には、使用痕の明確な敲石・磨石のほか、それらと礫形状は似るもの、使用痕の明確でない資料も多くみられた。礫塊石器は、一定程度のまとまりを持って分布し、礫群の分布とは重なっていない。

MB 2 中位 (Via層) では、丘陵の尾根部に近い平坦な部分から、礫群3基、最大長3cm程度のナイフ形石器が確認された。ナイフ形石器の石材は、大半が頁岩である中、西北九州産と思われる黒曜石製のものが、1点みられた点は特筆される。このほか、剥片や敲石・台石等も出土した。

MB 1 下部 (IVb層で、AT直上) では、MB 2 同様尾根筋に近い平坦面から、礫群2基、剥片・尖頭器・剥片類・敲石・台石等が確認された。

Kr-Kb中位～下位 (IVb層) から、小形のナイフ形石器が多数出土した。同じく角錐状石器、剥片、敲石、台石等が、礫群の周囲から出土した。

Kr-Kb上位 (IVa層) からは、船野型細石刃核・畦原型細石刃核が出土した。

Kr-Kb (IVb層) では、丘陵南面の緩斜面より礫群12基が検出されたが、時期的な細分は、現在整理中である。

なお、調査の過程でKr-Iwより下層にあたる明褐色土層の良好な堆積が確認されたため、複数地点で面的な深掘りを行った。この結果、ML 5 中で剥片1点と多数の自然礫、Aso-4 中で炭化材が確認された。剥片については、土層の堆積状況や石器の型式学的な検討から、Kr-Iw以上の包含層から落ち込んだものと判断された。また、Aso-4 中の炭化材は、2m四方の範囲に集中して確認された。材の大きさは、最大で長径5cm、断面径3cmとなる。Aso-4 以下については、深掘りの結果、小規模な土石流に伴う混礫土層の堆積が確認され、遺物等はみられなかった。



写真23 遺跡遠景（南より小丸川方面を望む）



写真24 遺跡全景（南より）

② 縄文時代草創期～早期

丘陵南側の緩斜面で、MB 0 中から炉穴 7 基が検出された。炉穴は、長径 3 ~ 4 m、残深が 0.5 ~ 1.0 m のものが多く大型で、中にはブリッジと推定される痕跡を残すもの、煙出し口と思われる部分に焼土がびっしりと張り付くもの等がある。また、足場の床面近くから貝殻条痕文土器の出土した炉穴もあった。多くの炉穴は、足場を南の方にして掘られており、北に向かって新たな炉穴を掘り込むものもある。

(3) 小結

後期旧石器時代石器群は、編年的に以下のようにまとまる。なお、今後の整理の中で、統合・細分も予測される。

- Kr-Kb 上位 船野型細石刃核、畦原型
細石刃核、細石刃、剥片、
石核、碎片
- Kr-Kb 中位～下位 小形のナイフ形石器、角
錐状石器、剥片、石核、
スクレイパー、礫塊石器
- MB 1 下部 剥片尖頭器、剥片、礫塊
石器

A T

- MB 2 中位 小型のナイフ形石器、剥
片、石核、礫塊石器
- MB 2 下位 剥片、石核、礫塊石器

縄文時代草創期～早期については、丘陵尾根部に沿って、連なるように集石や散礫が確認され、丘陵南斜面にのみ、炉穴が検出されるなどその分布に偏りがみられる。

現在、集石間の礫の接合等を進めており、最大 70 m 離れた異なる集石間での密な接合関係等を既に確認できている。

包含層は重層的であり、また各層遺物も多数出土しているので、整理にあたって編年的位置付けを更に進めていきたい。

I	表 土
II	K-Ah
III	MB 0
IVa	ML 1
IVb	Kr-Kb (~MB 1)
V	A T
VIa	MB 2
VIb	MB 3
VIIa	ML 3 ~ ML 4
VIIb	Kr-Iw
VIIIa	
VIIIb	明褐色ローム
IXa	Aso-4
IXb	Aso-4
X	マンガン層
XI	明褐色ローム
XII	泥質砂質土層

図26 層序柱状図

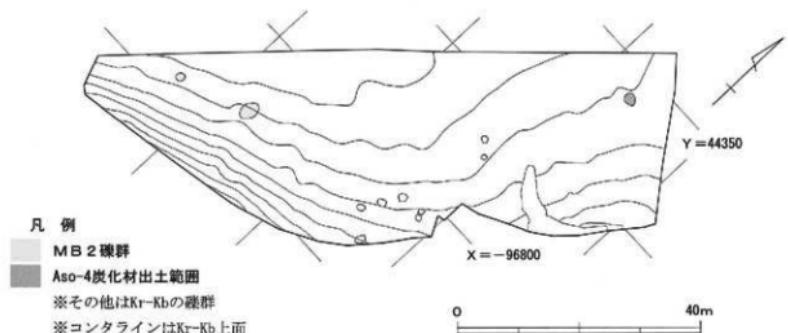


図27 B区遺構の分布 (1/400)



写真25 左 : MB 0 の集石群



右 : MB 2 の碑群



写真26 遺跡全景

(1) 遺跡の立地

高鍋町の南西部に所在し標高約90mで、新富町祇園原から畦原・三財原・追分、高鍋町市の山・中尾・牛牧にかけて広がる三財原段丘面の中西端に位置する。西方約70mには上位の茶臼原段丘面の段丘崖が迫っている。

(2) 調査の概要

三次調査では無遺物層を重機で除去した後、ML 1 (V層) 下部から掘り下げを行った。ML 1 では石鏸、細石刃、ナイフ形石器等が出土したが、遺物密度はきわめて低かった。土坑16基、小穴4基が検出された。Kr-Kb (Vla～Vlc層) では細石刃、角錐状石器、ナイフ形石器、スクレイパー、敲石等が出土し、土坑12基、小穴2基、礫群1基が検出された。MB 1 (VII層) では角錐状石器、スクレイパー、台形石器、敲石、台石、石核等が出土し、本調査区の遺物ピークとなっている。また、礫群8基が検出された。ML 2 (VIIa層) では角錐状石器、ナイフ形石器等が出土し、礫群3基が検出された。MB 2 (IX層)、A-Fmに相当すると思われるX層、MB 3 (XI層) ではそれぞれ剥片が出土したが遺物数は少ない。

四次調査では調査区北側を調査中である。ML 1 (V層) では、ナイフ形石器、石鏸、石核、剥片等が混在して出土した。また、土坑4基が検出された。Kr-Kb中部 (Vlb層) では、多くの小穴や土坑が検出され、遺物を伴っていない、並びに規則性がみられないという特徴がある。



写真27 遺跡全景（南より）

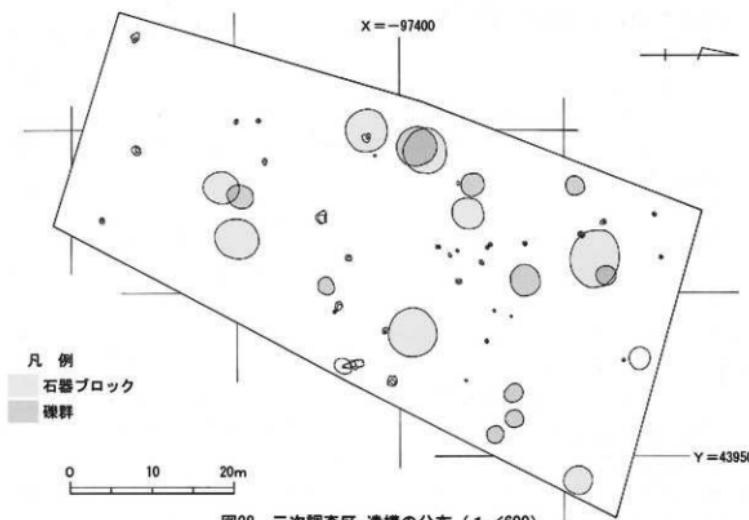


写真28 左上： 砂群検出状況
左下： 遺物・砂出土状況

右上： 砂群検出状況
右下： 現地説明会

遺物については、ナイフ形石器、剥片、碎片が出土した。MB 1 (VII層) では、調査区西側で石器ブロックが確認された。遺物については、角錐状石器、石核、剥片、碎片等であった。縞群については、石器ブロックに重なる3基を含む4基が確認された。

なお、三次・四次調査区とも、土坑や小穴はML 1 (V層) 下部からKr-Kb (VIa~VIc層) にかけて多く検出された。これらの遺構はML 1 (V層) からの掘り込まれたものと思われるが、遺物を伴わない点と、埋土とML 1との区別が付きにくく、Kr-Kbまで掘り下げてはっきりしたものが多いという点が共通している。

(3) 小結

旧石器時代については、三次調査を行ったD区の石器組成が、MB 1 (VII層) を中心に角錐状石器とナイフ形石器が多く、一次調査区と共通点が多い。四次調査の全体の状況はまだ不明であるが、現在のところ北隣の二次調査区より一次・三次調査区と石器組成が近い。縞群に関してはMB 1 (VII層) を中心に検出され、これらの石器群に伴うものと思われる。AT下位に関しては、石器ブロックが出土した二次調査区と比較して極端に遺物数が少なく散漫な分布状況である。

縄文草創期～早期については、ML 1 (V層) に土器は皆無である点や、石器は石鏃や剥片等が散発的に出土している点から、狩猟の場であったと想定される。土坑や小穴については、根茎類を探りだしたものとの解釈も含め、今後の調査結果を踏まえ検討していくたい。

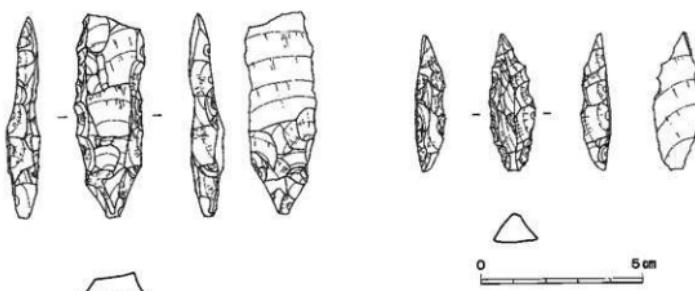


図29 出土石器 (2/3)

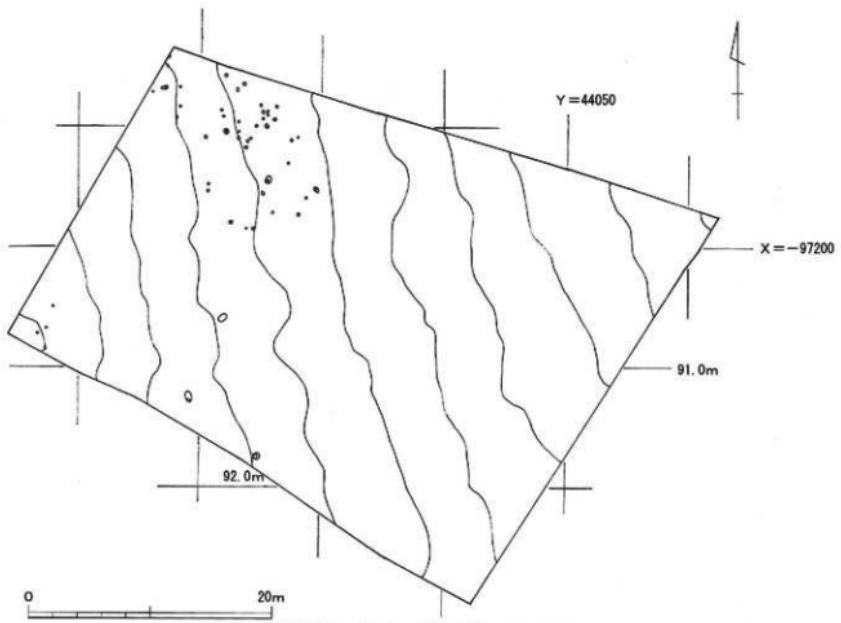
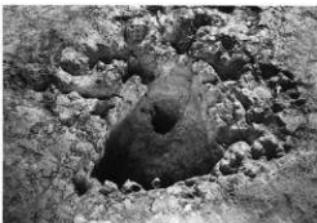


図30 四次調査区 Kr-Kb 造構の分布 (1/400)



写真29 左 : MB 1 (VII層) 検出状況



右上 : Kr-Kb (VI層) 検出土杭
右下 : MB 1 (VII層) 石器ブロック

63 音明寺第2遺跡 二次調査 (新富町大字新田字音明寺)

(1) 遺跡の立地

茶臼原段丘面の段丘崖裾部近くの斜面（標高約85～95m）に立地する。調査地は、畠地や宅地として階段状に削平されているが、旧地形は北西から南東に傾斜しており、西側に谷が迫っている。

(2) 調査の概要

本遺跡は、調査対象区北東部の標高の一番高いA区、一段低い中央部のB区、最も低い南部のC区、さらにC区西側に位置する一段高いD区に分けて調査を行った。A区東側を除いた調査区において、K-Ah面で遺構確認を行い、その後MB 0～MB 2まで順次掘り下げを行った。A区東側は、クロボク（II層）面でも遺構確認を行った。鍵層としては、K-Ah（III層）、Kr-Kb（VI層）、A T（VII層）、Kr-Aw（X I層）が確認されており、後期旧石器時代のMB 2（IX a層）、MB 1（VII層）、Kr-Kb（VI c層）、縄文時代早期のMB 0（IV層）、古代以降のクロボク（II層）が遺物包含層である。

① 後期旧石器時代

遺構は、B区のMB 1で剥片を伴った礫群1基、C区のMB 1とKr-Kbで小礫を主体とする礫群2基が検出された。またC区では、MB 1で碎片を主体とするブロックと剥片を主体とするブロックが検出された。遺物は、剥片が中心であるが、尖頭器・ナイフ形石器・敲石等も含まれる。これらは、MB 1に包含されるが、C区では、MB 2においても礫群1基と剥片数点が確認された。

② 縄文時代早期

遺構は、C区のMB 0より炉穴1基、陥れ穴1基が検出された。遺物は、A区のMB 1で土器片と石鏃・細石刃が、B区でMB 1より土器片が出土した。

③ 道路状遺構

A区のK-Ah面で検出された道路状遺構とD区の2条の道路状遺構の埋土からKr-Th（12～13C項）とみられる火山灰が検出された。これらの道路状遺構は同時期のものと考えられる。また、D区東側のトレンチでも硬化面が確認された。

(3) 小結

後期旧石器時代については、製品は少なく、多数の剥片、碎片を伴い、敲石や石核もみられることから石器製作の場であったことが考えられる。縄文時代早期については、土器の小片が多く、傾斜地であることを考えると流れ込みの可能性が高い。

道路状遺構は、音明寺第1遺跡及び本遺跡の一次調査の結果等を踏まえるならば、丘陵の裾野にそって道が南西から北東に向かって続いていたものと考えられる。



写真30 D区道路状遺構断面



写真31 遺跡全景（西より）



写真32 D区道路状遺構

64 東駒原第1遺跡 一次調査・二次調査 (新富町大字新田字下迫口)

(1) 遺跡の立地

三財原段丘面上の緩やかな傾斜地に立地する。標高は約85~90mで、南西に向かって下っている。一次調査区と二次調査区の西側には小さな谷がある。

(2) 一次調査の概要

一次調査では後期旧石器時代の調査を中心として、縄文早期に相当するML 1 (II層)と後期旧石器時代に相当するML 2 (III層)、MB 2 (Va層)、MB 3 (Vb層)の掘り下げを順次行った。

① 後期旧石器時代

MB 3相当層 (Vb層) では、調査区の中央部と北東部から、礫群8基とナイフ形石器、剥片、石核、礫器、敲石、磨石が確認された。

MB 2相当層 (Va層) では、主に南西部から、礫群4基とスクレイパー、剥片、石核、礫器、敲石、磨石、台石が確認された。



写真33 遺跡全景 (南より)

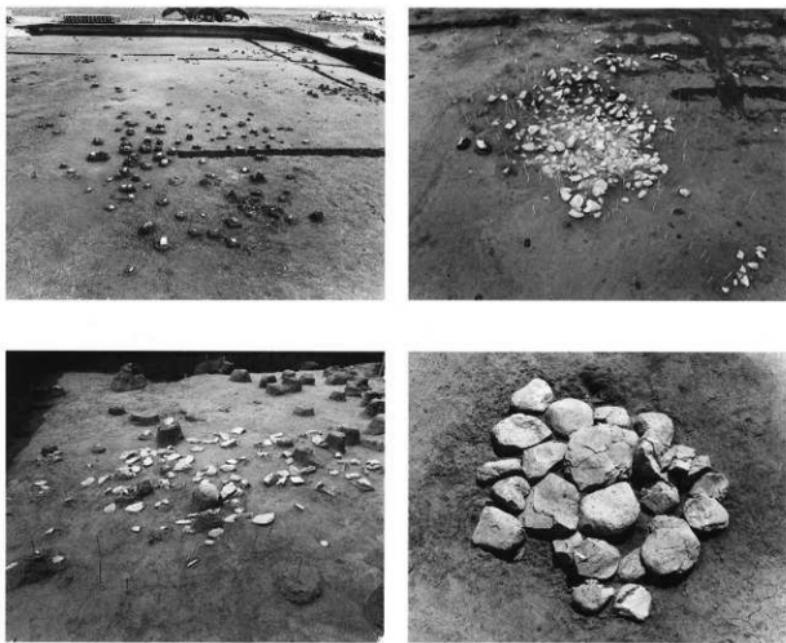


写真34 左上：MB 3の礫群
左下：ML 2の礫群
右上：ML 1の集石遺構
右下：ML 1の集石遺構下部の配石

ML 2相当層（Ⅲ層）では、南西部の緩斜面から、礫群4基とナイフ形石器、角錐状石器、剥片、石核、敲石、磨石が確認された。

MB 2やMB 3相当層（Va・Vb層）の礫群は、尾鈴山酸性岩類や砂岩、頁岩、ホルンフェルス等を主な石材とし、尾鈴山酸性岩類や砂岩の一部には赤化礫も認められた。礫群は直径約5～15mに散漫に広がるもので、これと共に直径1～2mmの炭化物も検出された。

石器や剥片は、頁岩や砂岩、ホルンフェルスを主石材とし、その大半は礫群と重なって出土している。

② 繩文時代早期

谷に向って下がる緩斜面では、ML 1相当層（Ⅱ層）より、集石1基が検出された。集石の構成礫は砂岩が多く、集石下部には直径約15～20cmの礫を配している。集石の埋土中には直径1～2mmの炭化物が含まれていた。

また、集石の周辺からは、黒色黒曜石製の石鏃、頁岩製の剥片等が出土した。

(3) 二次調査の概要

二次調査区は、後期旧石器時代の遺物・遺構が主体となる。縄文時代以降の包含層は、茶の栽培による削平のため残存していないものの、Kr-Kb (VI a層・VI b層・VI c層) 以下の堆積状況は極めて良好で、A T (VII a層・VII b層)、Kr-Aw (XI層)、Kr-Iw (XIII層) 等の鍵層も明確に確認できる。

XI層以下で遺物・遺構は確認されなかった。

① 後期旧石器時代

MB 3 (IX b層) では、礫群5基と剥片、石核、敲石等の遺物を確認した。いずれの礫群も構成礫の個数は少なく散漫な状態で広がっており、礫径の大きい礫片を多く含む。

A T直下のMB 2 (IX a層) では、ナイフ形石器、剥片、石核、原石、敲石等の遺物が出土し、約700点からなる石器ブロックが1箇所確認された。遺構は、礫群2基が検出された。MB 3 の礫群同様に構成礫の個数は少なく、礫径の大きい完形礫を多く含む。

MB 1 (VII層) では、土坑8基、礫群3基とナイフ形石器、角錐状石器、剥片等の遺物が確認された。Kr-Kb (VI a層～VI c層) では、土坑3基、礫群5基と黒曜石製細石刃・細石刃核、ナイフ形石器、角錐状石器、剥片、石核、原石、敲石等の遺物が確認された。黒曜石製細石刃・細石刃核は、Kr-Kb (VI a層) に集中する。

Kr-Kb～MB 1 (VI～VII層) の礫群は、MB 3・MB 2 の礫群に比して礫径は小さく、また構成礫の個数が増え、いずれも剥片等を伴う特徴がある。

なお、Kr-Kb (VI b層) 面で陥し穴1基が検出された。検出面での長径1.3m、底部長径0.7m、残深1.7mである。

(4) 小結

東畦原第1遺跡は後期旧石器時代を主体とする遺跡で、A T上下にわたって重層的に包含層が形成されている。A T下位では、MB 2～MB 3 の礫群10数基・少量の剥片類、MB 2上部 (A T直下) の礫群・ナイフ形石器と剥片・碎片などで構成される石器ブロック等が確認された。



写真35 左：Kr-Kb面の陥し穴 右：MB 1 の礫群



写真36 MB 2の礫群（手前）とMB 3の礫群（奥）

AT上位では、Kr-Kb～MB 1の礫群・ナイフ形石器や角錐状石器からなる石器群、Kr-Kb上部では細石刃石器群が確認された。

特記される点として、礫群と石器群のあり方が挙げられる。

礫群については、AT下位のMB 2～MB 3・MB 2上部の礫群は比較的大きめの完形の円礫～亜角礫で構成され、礫の密集度は低く散漫であった。これに対し、AT上位のKr-Kb～MB 1の礫群は小さめの破碎礫で構成され、礫の密集度は高く、周辺に単独礫が広がる場合もあった。また、礫群中には剥片・石核や敲石類等が混在することも多くみられた。このようにATを挟んで礫群のあり方が大きく変化する。

石器群については、AT下位のMB 2～MB 3と、AT直下MB 2上部～Kr-Kbとで大きく異なる。AT下位のMB 2～MB 3では剥片・若干の二次加工のある剥片類・石核や礫塊石器が多くみられた。これに対し、AT直下MB 2上部～Kr-Kbでは石器ブロックが確認される等、石器点数が増加している。ナイフ形石器や角錐状石器等、明確なツールを多く確認できる点もAT下位のMB 2～MB 3の石器群と異なっている。

現在、一次調査区と二次調査区に挟まれた地点（三次調査区）を調査中である。既調査同様に後期旧石器時代が主体となっている。

(1) 遺跡の立地

三財原川に向かって緩やかに傾斜する台地上に位置する。標高は約89mで、南西方向に緩やかに下がっている。

(2) 調査の概要

今年度の調査では、後期旧石器時代の包含層であるKr-Kb (V層) ・ MB 1 (VI層) 及びMB 2 (IXa層) ・ MB 3 (IXb層) の掘り下げを順次行った。

一次調査A区では、MB 2・MB 3の精査とそれ以下の層の確認調査を行った。MB 2上面では、前年度調査で検出されたチャート剥片集中域の残り半分があり、約600点の集中出土がみられた。この集中域は、チャート製石器の製作地点である可能性が高い。また、MB 3上面では、礫群2基が検出された。

B区では、Kr-Kbから礫群と重なって、多数の剥片・碎片が出土した。さらにMB 2では、頁岩製の剥片・碎片で構成される石器ブロックが、MB 3では、礫群4基が検出された。



写真37 遺跡全景 (南東より)

二次調査区は、一次調査A区に隣接する。Kr-Kbでは、頁岩製の剥片・碎片で構成される石器ブロックが検出された。MB 1では、礫群6基と頁岩製の角錐状石器・ナイフ形石器・敲石や台石・剥片・碎片等で構成される石器ブロック2基が検出された。MB 2では、礫群1基のほか、チャート製の剥片等で構成される石器ブロックが2基検出された。

(3) 小結

Kr-Kb～MB 1より石器ブロックが4基検出された。石材は、頁岩中心で、ナイフ形石器・角錐状石器・剥片・碎片とともに、敲石・台石も数点みられることから、石器製作の場であったと推察される。また、MB 2中のチャート製剥片・碎片等で構成される石器ブロックは、碎片の比率が高いこと、さらに、プランティングチップも多く含まれているものの、製品を含んでいない点は注意が必要である。

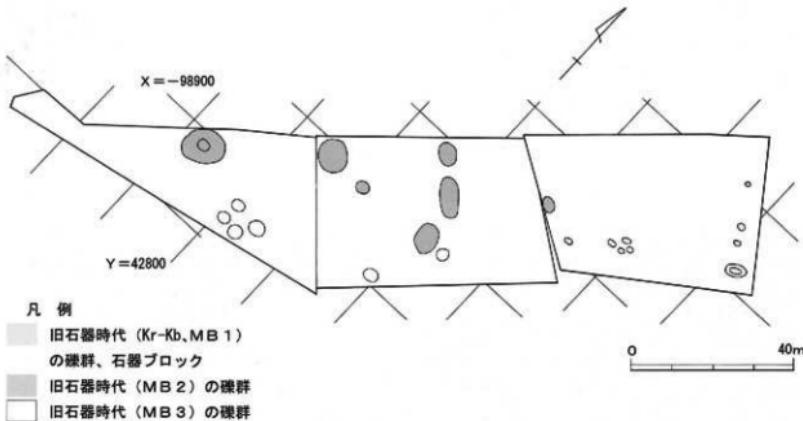


図31 遺構の分布

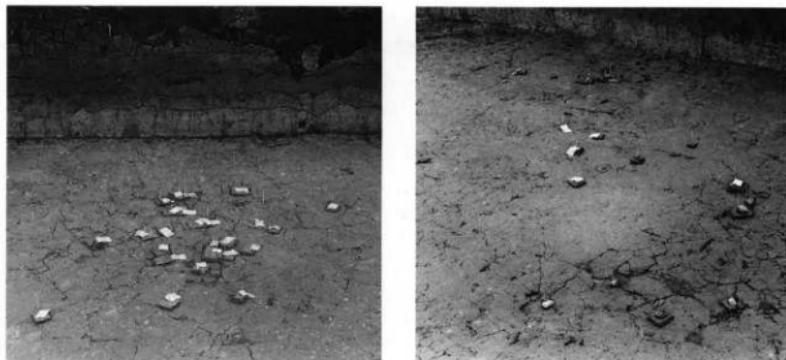


写真38 左：MB 2の石器ブロック 右：MB 2の礫群

(1) 遺跡の立地

一ツ瀬川の左岸に広がる三財原台地上にある。調査区は三財原段丘面（標高約86m）とそこに刻まれた開析谷の深年II面（標高約77m）が入り組む緩斜面に立地する。深年II面にあたる低地部は湧水が豊富で、古くから地域住民に利用されている。

(2) 調査の概要

調査区は丘陵縁辺部の北東に舌状に張り出す緩斜面と北西から南東へ走る小さな谷地形からなる。当初一次調査と隣接する約3,000m²を対象に調査を実施した。しかし、調査区西側境界で住居跡の端部が検出されたため、調査対象を広げ、K-Ah上面までの調査を行った。

① 弥生時代後期終末～古墳時代前期

表土除去後、残存する黒色土層（II層）を精査すると、タタキを施した壺や高杯の杯部など弥生時代後期終末から古墳時代前期の遺物が出土した。その後、K-Ah（III層）上面での遺構検出を試み、3軒の堅穴住居が検出された（S A 1～3）。

S A 1は3.90m×3.75mの隅丸方形プランを呈し、検出面から床面までの深さは最大0.45mを測る。貼床を有し、2本の主柱穴が確認された。住居の北東部分に焼土や炭化物がみられる。遺物は、タタキを施した壺や高杯の杯部、石包丁（方形抉り）や磨石等が出土した。

S A 2は5.60m×5.17mの方形基調のプランを呈し、2箇所の張り出し部を有する。検出面から床面までの深さは最大0.48mを測り、貼床を有し、4本の主柱穴が確認された。また、住居は9基の土坑との切り合いがみられる。住居中央部で多くの炭化物や焼土が確認された。遺物は鉄製釣針や高杯の杯部・円形透かしを持つ脚部、タタキを施した壺や櫛描波文状を施した複合口縁壺、ミニチュアの壺、石包丁（方形抉り）や砥石・磨石・台石等多数みられた。

S A 3は2.95m×2.75mの方形プランを呈する。削平されて残存状況が悪く、検出面からの深さは0.1mほどである。遺物はタタキを施した壺や赤化粧が出土した。

② 古代

確認調査において、低地部でKr-Thを含む層の下層に硬化面が確認されていたので、表土除去後遺構検出に努めた。その結果、西側斜面から東側の谷に向けて延びる最大幅1.7m、長さ6mを測る道路状遺構が検出された。幅2.0m、深さ0.4mの掘り込みに、砂混じりの土や粘土等を薄く層状に堅牢に積み上げた版築状を呈する。しかし、遺物が伴わず、明確な時代の確定には至らなかつた。

(3) 小結

今回確認された弥生時代終末から古墳時代前半にかけての遺構や遺物は、一次調査で検出された遺構や遺物に比べると、若干時期が新しくなる。集落が谷地形の低地から若干標高の高い丘陵地へと移動していった様子がうかがえる。

なお、検出された土坑9基全てがS A 2と切り合っていたが、遺物の接合状況や類例等を検討し、その性格について解明していくたい。

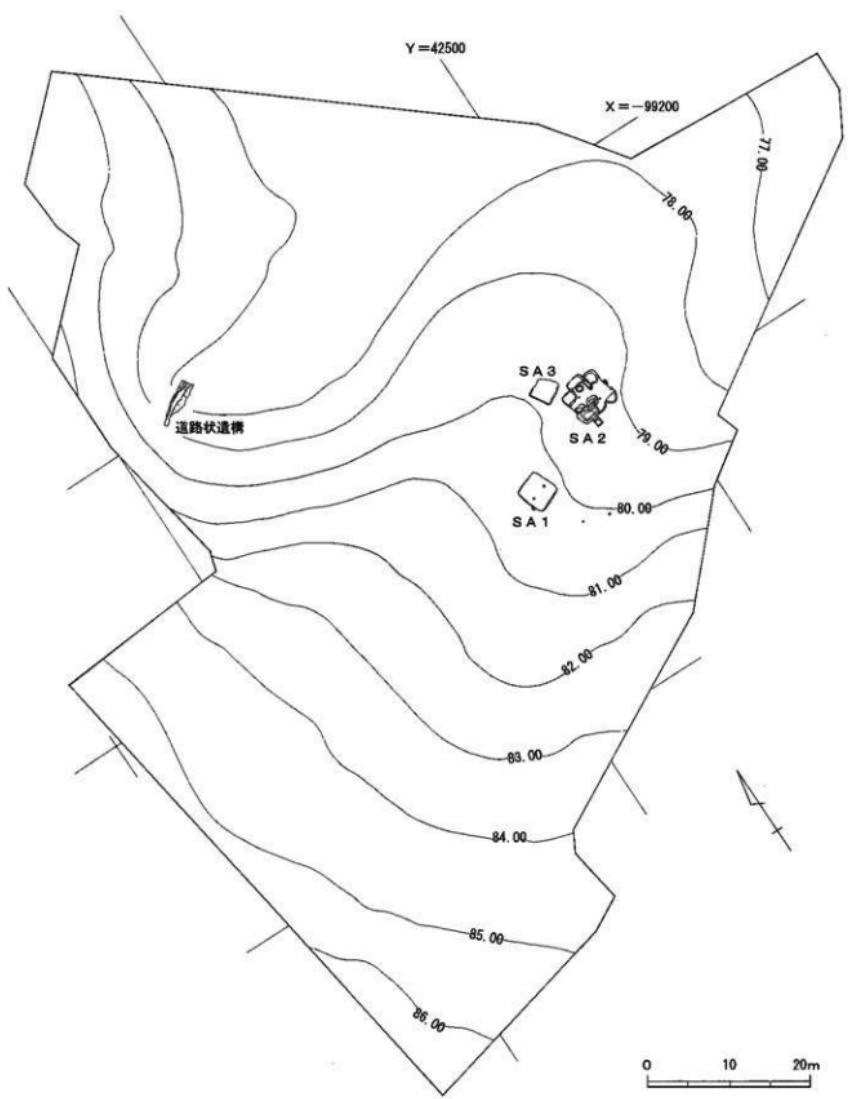


図32 遺構の分布 (1/300)



写真39 遺跡全景（北東より）

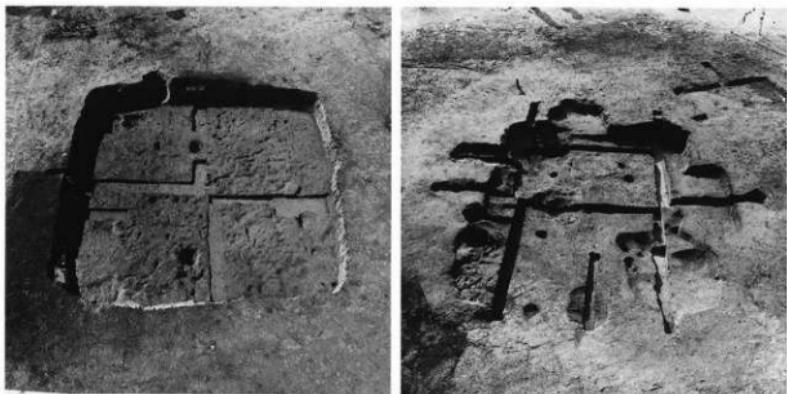


写真40 左：SA 1（北東より） 右：SA 2（東より）

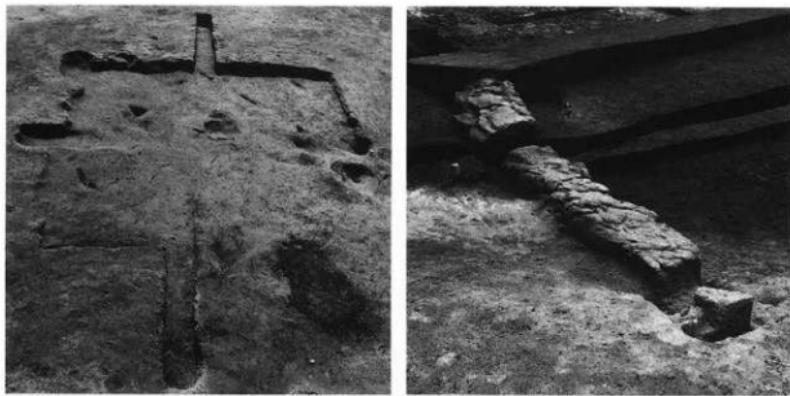


写真41 左 : SA 3 (北東より)
右 : 道路状遺構 (北西より)

1・2・4 SA 2
3 小穴内出土

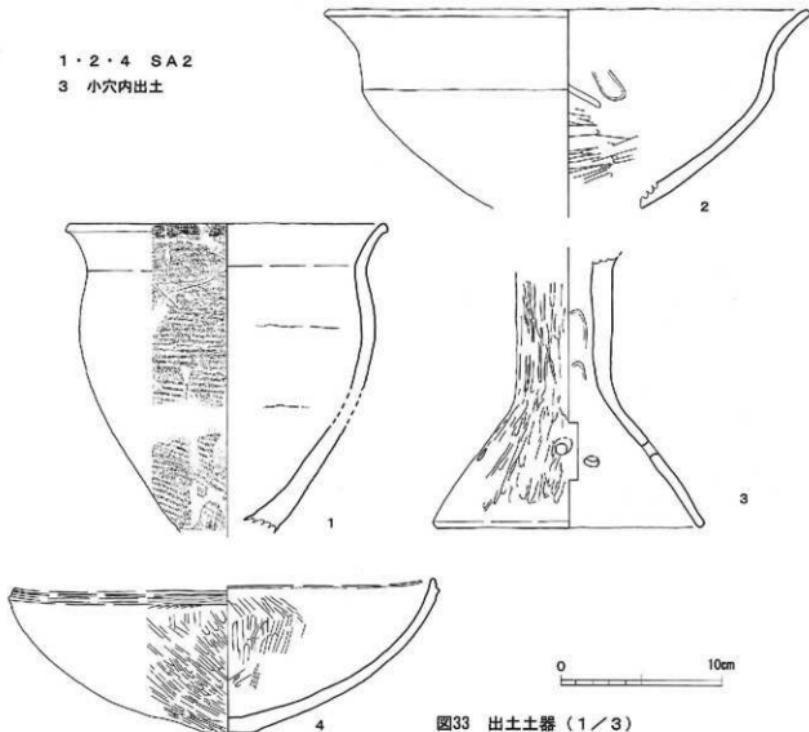


図33 出土土器 (1/3)

(1) 遺跡の立地

一つ瀬川左岸に広がる三財原段丘面上に立地している。標高は約87mで、北西方向に緩やかに傾斜している。

(2) 調査の概要

本遺跡は、確認調査時にMB 0 (IV層) から石鏃が、Kr-Kb平面 (VI層) から角錐状石器、剥片が出土した。この結果をもとに、本調査では、MB 0 (IV層)・Kr-Kb (VI層)・MB 1 (VII層) 及びAT層下のMB 1・ML 2 (Xa・Xb層) の調査を行った。

本遺跡の鍵層としては、隣接する西畦原・東畦原各遺跡と同様に、K-Ah (III層) 以下、Kr-Kb (VI層) やAT (IX層)、Kr-Aw (X II層)、Kr-Iw (X IV層) までを確認している。

① 後期旧石器時代

Kr-Kbを中心として角錐状石器・剥片・石核等を含む石器ブロックが検出された。このブロックは約4~5mの範囲で分布していた。石器ブロックは、多くの剥片類で構成され、製品を含んでいない。MB 1・ML 2 (Xa・Xb層) も精査したが、遺構・遺物は何ら検出されなかった。

② 繩文時代早期

MB 0 (IV層) では石鏃や剥片が数点出土した。また、本遺跡の南西方向に陥し穴3基 (SC 1~3) が検出された。石鏃は最大長2.0~2.5cm程度で、石材としては桑ノ木津留産や阿蘇小国産と思われる黒曜石やチャートが用いられている。

SC 1は平面長径1.1m、残深1.6m、SC 2は長径1.27m、残深1.85m、SC 3は長径1.95m、残深2.35mである。各陥し穴の位置関係は、SC 1→SC 3は約2m、SC 1→SC 2は約6mと近接し、また調査区の中で南に偏って分布する。長径の向きは、SC 1・SC 3はほぼ東西南向、SC 2は北東~南西方向になる。各陥し穴の埋土は、Kr-KbやATなどのブロックが混在し、底部付近には、粘性のある黒色土が共通して堆積する。

(3) 小結

今回の調査で、Kr-Kb (VI層) では、石器ブロックが2箇所検出されたことから、本遺跡は、後期旧石器時代には、石器製作の場であったと推察される。

また、MB 0 (IV層) では土器の出土はなかったが、石鏃が数点出土し、周囲に3基の陥し穴が検出されたことから、繩文時代早期には、本遺跡周辺は狩猟の場であったと推察される。なお、陥し穴については、主に埋土に関する自然科学分析を実施する予定である。

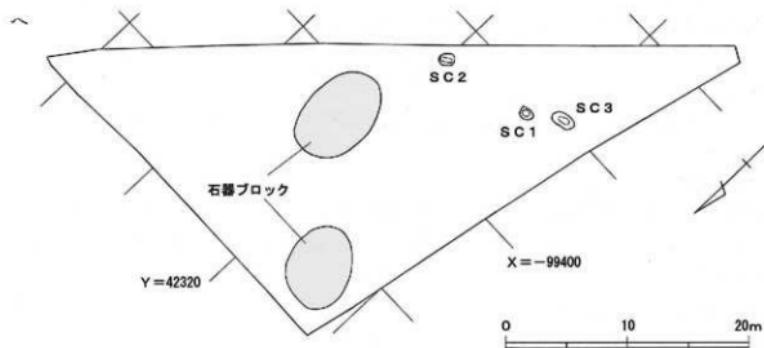


図34 遺構の分布 (1/400)



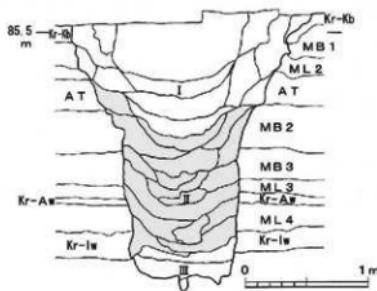
写真42 遺跡全景 (北東より)



写真43 MB 0~Kr-Kbの遺物出土状況
(北西より)



写真44 陥し穴 (SC 1・SC 3) の
断ち割り (南東より)



I 黒褐色～暗褐色（一部は緑オリーブ褐色）の埋土で弱粘質。Kr-Kbを含み、硬くしまっている。
II 黒褐色（一部は緑オリーブ褐色）の埋土で、弱粘質。下層は黒褐色でやや軟質。全体的にATを多く含む。中層には、オレンジ色、暗褐色土を、下層には黒褐色土を多く含む。上層から中層にかけてはしまりがない。
III 黒色土の埋土で粘質。一部ATブロック、Kr-Iwを含む。下層埋面の一部が緑灰色土。

図35 SC 3 土層断面 (1/40)

71 勘大寺遺跡 (新富町大字新田字駒取場)

(1) 遺跡の立地

鬼付女川右岸の三財原段丘面上に立地する。標高は約87mで、南東方向に緩やかに下がっている。

(2) 調査の概要

耕作によってK-Ah（II層）の大部分が削平されている。これまでの調査で、道路状遺構が検出され、縄文時代早期、後期旧石器時代の遺物包含層が確認されている。

① 後期旧石器時代

MB 1～ML 2（VI～VII層）で礫群4基が検出された。また、礫群とやや離れて石器ブロックが確認され、角錐状石器やスクレイパー、剥片などが多数出土した。

② 縄文時代早期

MB 0～ML 1（III～IV層）で、散礫を伴う集石遺構1基、陥し穴2基が検出された。陥し穴は長径1.3、短径0.8m、残深1.0mのもの、長径1.2m、短径1.0m、残深0.9mのものとがある。両者は近接して構築されている。底部には逆茂木痕と思われる小穴が確認された。

遺物包含層からは、石錐や剥片等がわずかに出土したのみである。石錐は完形品が目立つ。

③ 道路状遺構

表土を除去した時点で、硬化面が一部露出し、断面の観察から複数の切り合いが確認された。類例から道路状遺構とみられ、東西方向にS字状に蛇行している。幅約4m、残深約0.4mである。埋土中には高原スコリアとおぼしき堆積物がみられる。硬化面は最も厚いところで約0.1mあり、硬化面最下部は赤褐色を帯びていた。色調は水中の鉄分が沈殿した場合と酷似している。埋土中からは土師器、須恵器の小片が出土した。

(3) 小結

道路状遺構は、現段階では時代・時期が明らかになっていない。今後、埋土や遺物の検討を行うとともに、どこへ向かい、どのような性格のものであったのか、といった点についても考えていく必要がある。

旧石器時代に関しては、現在ATを除去し、MB 2（IX層）の掘り下げ、精査を行っているところである。遺跡の性格については、調査終了を待って判断したい。



写真45 MB 1～ML 2 (VI～VII層) 遺物・礫群の分布



写真46 左：道路状遺構の遺物出土状況（西より）



右：道路状遺構（東より）

74 尾小原遺跡 (新富町大字新田字尾小原)

(1) 遺跡の立地

新田原段丘面から南西部に張り出す尾根上に位置する。現在は標高約70mの畠地になっている。

(2) 調査の概要

本遺跡は、後期旧石器時代から弥生時代までの複合遺跡である。後期旧石器時代では、4期の遺物・遺構が検出された。また、縄文時代草創期の陥し穴状遺構が4基検出された。弥生時代の遺物は少量であり遺構は検出されていない。

① 後期旧石器時代の遺構・遺物

MB 3 (X II層下部) では、礫群1基が検出された。MB 2 (X II層上部) では、谷に向かう緩やかな傾斜面で礫群が2基検出された。ML 2 (IX層上部) では、礫群が4基検出された。3基は礫に混じって石核や剥片が出土している。MB 1 (VII層) では、礫群が1基検出された。その礫群の周囲には散漫に礫が広がり、それらに混じって角錐状石器・ナイフ形石器等が出土している。Kr-Kb (VII層) では台形石器1点・剥片及び碎片から構成されるブロックが1箇所検出された。



写真47 遺跡遠景（北東より）

② 繩文時代草創期

ML 1 下部（VI層）では、黒曜石製石鏃・剥片が出土した。ML 1 上部（V層）では、黒曜石製石鏃・剥片・貝殻文系土器の小片が出土した。MB 0（IV層）では、黒曜石製石鏃・親指大の黒曜石原石・石核・剥片が出土した。またMB 0 上層で赤化した小角礫からなる集石 1 基が検出された。

なお、Kr-Kbの層中で陥し穴とみられる遺構が 4 基検出された。そのうち 2 基は、調査区北西の谷に向かって緩やかに傾斜する斜面に 5 m ほどの間隔で並んで検出された。残りの 2 基も地形からみて小規模な谷際に隣接して検出されている。形状はいずれも円形で直径 1.0m 深さ 1.0m 程であった。

③ 弥生時代

クロボク（II層）では、弥生土器片・打製石斧・石包丁等が出土したが、削平を受け残存面積自体が少ないため、これらに関連する遺構は検出されていない。

(3) 小結

後期旧石器時代の中では、各時期ともに石核・剥片等が多い割には製品が少ないことが特徴として挙げられる。ML 1 から Kr-Kb 中の黒曜石製石器から構成される石器ブロックはナイフ形石器の製作地点として評価できよう。



写真48 左上：調査区西壁土層
左下：Kr-Kbの黒曜石剥片ブロック

右上：MB 1 の礫群
右下：MB 2 の礫群